



# 大岡昇平全集

第六卷

大岡昇平全集 第六卷

定価 三五〇〇円

昭和四十九年十一月二十日 印刷  
昭和四十九年十一月三十日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目一  
電話(五六一)五九二一  
〒104 振替東京三三四

検印廃止  
©一九七四

大岡昇平全集 第六卷 目次

小説 六

天誅組

脱藩

草莽

三十石船

船中書取

天誅

武市半平太

公子登場

勅使東へ行く

再会

帰郷

庄屋屋敷

151 124 116 99 85 70 51 35 25 18 3 3

旋風時代

同志の人々

浪士人別

生麦事件始末

木屋町三条

率兵上京

拳兵まで

あとがき

天 誅

拳 兵

吉村虎太郎

姉小路暗殺

高杉晋作

龍馬殺し

渡辺華山

解題

池田純益

401

386 373

小説  
六





## 天 誅 組

### 脱 藩

南国土佐といっても、高知県高岡郡檮原村の三月はまだ寒い。高知市の西方約八十キロ、伊予（愛媛県）との国境に接した、海拔四百五十メートルの山の中の村である。冬には雪が家の軒まで積ることがある。

須崎港から新莊川をさかのぼって、だらだら上りに、土佐西方山地に分け入った道は、葉山と船戸の間で、布施の急坂に会い、一キロの間に、二百メートルの高さを一気に上ってしまふ。

そこからは芳生野、北川、檮原など、津野山の高原で、一村で土佐湾に注ぐ四万十川の水源地帯の一つである。気候は寒冷、土地は痩せ、水田に乏しく、南国土佐の別天地を形づくっている。この物語がはじまる明治維新前夜の文久二年（一八六二年）では、農民は多く紙の原料、楮草を植えて、作間渡世としていた。乏しい米作は年貢に取り立てられるから、農民の口に入るのは、粟、黍、椎の実だけである。

関西ではったい粉といえ、小麦をひいた粉のことである。土佐のはったい粉の原料は、トウモロコシである。明治以前は黍であった。かわいた粉のままのやつを、紙をまるめた即製のスプーンをたくみにあやつって口にかきこむのが、檮原村の村民の特技の一つである。

村の経済は、紙の原料である楮草の栽培で支えられている。現在でも土佐紙は高知県の主要産業の一つで、一九六〇年代の統計では、手すき工場、機工場五十、年間移入金額は、六

十億円に達している。維新直後藩札を刷って以来、紙幣には強くつやのよい土佐紙が用いられて来た。戦後大量に発行された百円紙幣が硬貨に切り替った時、土地の製紙業は打撃を受けたが、やがて千円札、一万円札が百円札以上に印刷されたので、土佐の製紙業は繁栄を続けている。

製紙技術はもと中国から来たと推定されるが、早くから石見国司柿本人麿の発明という伝説があった。その技術が周防灘を渡って伊予に入り、続いて土佐にもたらされた、という従って伊予との国境に近い髷原村には早くから紙の製造が行われていたとしても不思議ではない。

慶長年間関ヶ原戦役の功により、掛川六万石山内一豊が長宗我部に替って、土佐二十四万石に移封された時、浦戸城で押収した土地台帳には、二十筆以上の紙漉地が記載されていた。

徳川へ忠勤をげむ山内家が、幕府への献上品ときめたのも紙であった。二代忠義の執政野中兼山が財源として目をつけ、藩の専売とした産業の中に、紙が入っていた。その政策の延長である御蔵紙の制度は、この物語のはじまる少し前、やっと廃止されたばかりであった。

現代の土佐紙の原料は、ほかの和紙と同じく、こうぞ、みつまた、雁皮であるが、この物語のはじまる頃では、主に楮草から作られた。しかし紙屋敷は、大抵は土地の富農の経営

に属する。一般の農民は刈り取った楮草を、それらの紙屋敷か、或いは高知から買いに来る商人に売る。

ただし厳格な統制経済を敷いている土佐よりは、国境を越えて、伊予の商人に売る方が、値がよい。特に藩境に近い髷原村では、運賃の関係からそうなるのである。

しかし髷原の西方四キロの宮野々にはちゃんと関所があって、移出の品物の数量は記録される。嚴重に口銀、つまり輸出税が課せられて、国内でさばくのと、いくらも違わなくなってしまう。第一、藩外移出は国内の需要をみたしてからでないと許されない。

関所は品物だけではなく、人間の出入りを嚴重に監視するところである。

土佐は南に太平洋の荒海を控え、北に四国山脈をめぐらしている。薩摩と同じく藩境を閉じた国である。人口に比べて耕地が少ないので、土地経済の藩政時代には、藩境閉鎖は必要とされる処置であった。文久二年にはさらに他国人の出入国を監視する理由があった。

嘉永六年（一八五三年）の黒船渡来以来、南に海を控えた土佐藩は、幕府の国防強化方針に従って、強力な富国強兵策を推進しなければならなかった。山内家の隠居容堂は、終始して公武合体による漸進主義者であったが、それは必ずしも藩祖一豊以来の、徳川家の恩顧に報ゆるためではなく、それ

が土佐藩の利益であるという判断によるものであった。

しかしもともと土佐の藩学には、山崎闇斎の垂加神道の流れを引き、皇室尊崇の伝統がある。文久年間から、幕府を倒して、王政復古を実現するほかに、夷狄の侮りを避ける道はないという、いわゆる尊王攘夷の過激派が、下級武士の間に生れていた。これはその頃から日本全国に拡った思想である。人間は藩主の家臣である前に天皇の赤子であると称して脱藩した志士の大群が、京都に集まった。或いは各国を遊説して廻った。徳川三百年の平和の間に発達した交通機関に乗って、たちまち全国的な規模に達したのであった。

文久元年、高知城下の下級武士市半平太を盟主として結成された土佐勤王党員は、剣術修業に名を藉りて藩外に出た。多くの他藩の志士が藩境まで連絡に來た。土佐の国の北をかこむ四国山脈の随所にある関所は、だんだん守りにくくなっていた。

文久二年三月六日の朝七時頃、髷原村から宮野々の関所に向う道をゆっくり歩いて行く一人の侍姿の若い男があった。

せいはあまり高い方ではない。ぶっさき羽織に野袴、小さな荷を、肩からはすかいに結んだ、軽い旅のいで立ちである。

顔かたちは、笠にかくれてよく見えないが、道を見晴らす山端の家の前で働いていた小百姓の伊作にはすぐわかった。

三年来、髷原村近在七カ村を管理している大庄屋、吉村のだ

んなであった。

この年は閏年で、旧曆三月六日の髷原村はまだ寒かった。山の北側のくぼみに残った根雪がやっと解け、梅はほころびはじめたばかりである。

伊作の家の庭からは、その山道が見渡せた。それは川向うの山際に沿っただら下りで、髷原村から大越峠という低い峠を越えて四キロ、宮野々の関所へ通じる道である。その道を、峠の方から早足で降りて来る旅装束の姿は、一キロほど先から、見えていた。

それがすぐ吉村のだんなだ、とわかったのは、かぶった笠のせいであった。それは侍がよくかぶる編笠と同じ形だが、黒い漆が塗ってある。少し小形で、安っぽい感じがなくてもない。とにかくこんな笠をかぶる人間は、髷原村では吉村のだんなのほかにはいないはずである。

吉村虎太郎は三年来、髷原村とその枝郷、宮野々、上成、弘野、西ノ川、川井、川口、房六の七カ村を管理する大庄屋である。前からこの地方では名を知られていた。

髷原村の東七キロ、芳生野、北川村の庄屋太平の長男だつた。十二歳で家督を相続し、十七歳で北川の庄屋の実務についてからは、楮草の集荷蔵を建てるために、官銀借金を藩庁に願ひ出たり、年貢軽減を懇訴したり、村のためによく働く庄屋として評判が高かった。

しかし海岸地方の須崎浦の庄屋に転動になり、その地に住む学者の間崎滄浪先生や、高知の城下で勤王家として名高い剣術師範武市半平太先生の家へ出入りするようになってから、少し人が変わったということである。

刀も三尺近く長いものを差すようになった。或る日集まりの席で、郡役所の下役から呼び捨てにされたのをいきどおり、戸波や高岡などの大庄屋七人の連名で、郡役所に訴状を提出した。須崎から下分へ転動になったのは、そのためだという。樽原村へ来た当座は下等米の太米で年貢代納を願ひ出たり、村の不意の出費に具えて石の貯金箱を作って、庄屋屋敷の玄関へ据えつけたり、うわさにたがわず、働きの庄屋である証拠を見せてくれた。

ただ去年の春頃からよく高知の城下へ出て、十日、半月滞在することが多くなった。ことに先月の十日には、なにか特別な御用だとかで、宮野々の藩境を越えて、長州まで出張した。そして二十七日に帰ったばかりであった。

そのへんな黒い笠は、その時吉村のだんなの頭の上のっていたものだった。それは伊豆葦山の代官の江川太郎左衛門が、訓練兵にかぶせるために工夫したその名を取って、「葦山笠」と呼ばれるのだという。紙綴りで編んだものだから、不要の時はつぶして平らにしてしまえばよい。持ち運びに便利で、旅にはこれに限ると、吉村のだんなは、長州から帰っ

た晩、庄屋屋敷に集まった村の衆に自慢したそうである。

近頃上方や中国筋を往来する関東の浪士が持って来たもので、吉村のだんなはそれをこの前の旅行の時、三田尻で出会った浪士から、貰ったのだという。

吉村のだんなはそういえば、前からあれでなかなかのおしゃれで、庄屋に許された絹の着物を長めに着て、いつも雪駄をはいていた。須崎浦にいたころ、雪駄のまま郡役所へ入り込んで、五日間の謹慎のお咎めを受けたこともあったという。従って吉村のだんなが他国から持ち帰った笠を自慢なさっても、別に不思議はなかった。

ただ伊作としては、これで十日の間に吉村のだんなが二度も家の前の道を通るのを見たことになる。そうしげしげと国をお出になる、なんの御用があるのか、と少し気がかりである。

伊作は思わず立ち上り、五、六歩前へ進んで、敷地の端れまで行った。そしてじっと動いて行く吉村のだんなの姿を眼で追った。向うでも伊作に気がついたらしい。歩きながら右手を上げた。そういう気さくな吉村のだんななのであった。

伊作はすぐお辞儀を返したが、それだけでは気がすまず、そばまで行くことにきめた。そしてなぜ、なんの御用で、こうしげしげ関所をお越えになるのか、きいてみようと思った。家の前の坂を駆けて降りた。

その時、彼は禰原の方角に馬の蹄の音を聞いたのである。その方はこの道を挟む低山がゆっくり大越峠へ向って高くなっているが、その上にさらに高く、頂上に雪を残した四国山脈が、遠く朝の陽を受けて輝いている。その山を背景にした坂道を、一散に馬を飛ばして来る一人の長身の男の姿も、伊作はすぐ見分けることが出来た。宮野々のほか三方所の枝郷の肝煎りで、宮野々の関所の番頭ばんとうを勤める玉川の旦那である。

(なにかあったのかな)

伊作が思わず足をとめて、川に渡した板橋を渡りかねている間に、玉川の旦那はみるみるうちに近づいて来た。吉川の旦那が立ちどまって、笠をあげて、笑うのが見える。しかし玉川の旦那の方はにこりともせず馬から降りた。わずかと歩み寄った。

玉川の旦那は六尺豊かな方であるから、吉川の旦那の前へ立つと殆んど首だけ高い。その言葉は、伊作のところまでは聞えなかったが、様子では、なにか容易ならぬことのように見える。しかしなにか答える吉川の旦那の顔から、笑いはいは去らない。

伊作は庄屋衆二人の話に立ち入ってはわるいと思ひ、流れにかけ渡した板の手前に立ち止まってしまったのだが、もしこの時吉村虎太郎と玉川壮吉の間に交わされた会話を聞いた

ら、かなり驚いたにちがいない。

「おんし、また脱藩する気か」

と玉川はいったのである。

「いや、脱藩ではない」と吉村は笑いながら答えた。「朝から脱藩する度胸はない」

「しかし旅仕度をしているではないか」

「いかにも、宮野々から九十九曲まがひを越える。長浜から中ノ関へ渡る。萩へ行って、長州の同志久坂義助どのに会い。しかし手形はこれ、ここに持っている」

そういいながら、吉村は懐をさぐって、一枚の木札を差し出した。番頭を勤める壮吉には改めずともすぐにわかった。藩の焼き印の入った、正規の番所通過証であった。

「どこで手に入れた」

玉川はにがにがし気な表情をくずさずいった。

「武市先生にいただいた」

「なに、武市先生？」

玉川は信じられぬという顔をした。

「そんなはずはない、先生はおんしの亡命に反対されたはずだ。同じ土佐勤王党に属するわれわれとしては、あくまで藩に止まって、藩論を勤王に統一するのが、第一義であるはずだ」

武市半平太、号は瑞山みづかみ、剣技をもって仕えたが、早くから

勤王の志あり、井伊大老暗殺を期に高まった氣運に呼応して、文久元年土佐勤王党を組織した。血判加盟する者百九十二人、吉村虎太郎、那須信吾等齋原の番人庄屋もみな加盟していた。吉村が先月萩へ行ったのは、武市から久坂へ宛てた手紙を届けるためだった。

「ところがそうではない」と、吉村はなおも笑いながら答える。

「おれは高知城下から、昨夜帰ったばかりだが、吉村は功名心強くて、止むべからず。思うようにやらせるほかはない、といわれた。そしておれはむろん、これから直ちに京都に上り、この度の驚天動地の壮挙に参加するつもりなのだ」

吉村の口調はだんだん演説口調になって来た。

「おんしも知つての通り、薩摩の後見職久光公は、一千余名の精鋭を率いて、まもなく上洛のはずである。名目は参勤交代であるが、途申京都に立ち寄って、攘夷の詔みことりを乞ひ、参勤の人数を直ちに討幕の軍として、箱根に進める。王政復古を実現する、千載一遇の好機だ。この際、土佐の僻地に因循して、藩論統一などと呑気なことをいつている時ではない。先駆けするは諸侯と庄屋の任だ。——と武市先生に申上げたら、それでは好きなようにするがよい、と申されて、この手形を周旋して下さったのだ」

しかし玉川は説得されない。

「さじを投げられたのが、わからんか」

「おかしなことをいうな」吉村は少しむつとしたりしかつた。

「われらこの度、脱藩はあだやおろそかのことではない。もとより身命をなげ打つての行為だ。——おんしの用が、手形を調べる事なら、用はすんだ。おれは行くぞ」

といながら、歩き出そうとする。

「いや、そう怒られては困る」玉川は急いでさえぎつた。

「所用あつて松原へ出向いていたが、おんしが高知から帰つたと聞いて、駆けつけて来たのだ。昨日帰つて今日出立とは思ひも寄らぬ、今しがたおんしの家へ行って、太平どのに聞けば、もう発つたと言ひ。急いで馬に鞍おかせて、駆けつけて来たのだ」

「おやじどのの意を受けて、脱藩を思い止まらせようとして来たのなら無駄だぞ。すでに同志宮地宜藏みやじのぞうは、須崎から海路、長浜に先行している。あさつて落ち合ひ約束なのだ」

「あのおとなしい宮地も脱藩するのか」

玉川は考え深げにいった。

「脱藩ではないというに。手形はみな武市先生がはからつて下さつた」

「形はどうあろうと、実は立派な脱藩ではないか」

と、玉川はいったが、また吉村の顔がこわばるのを見て、急いで付け加えた。

「まあ、よい、歩きながら話そう。どっちにせよ、おんしを  
国境まで送るつもりで来たのだ」

伊作はこの時、川を渡り、二人のだんなのそばまで来てい  
た。吉村はその姿に眼をとめて、二、三步引き返して来た。

「伊作、精が出るな」と声をかけた。「お袋はどうだ。去年  
から労咳ろうがいで、伏せているときいたが」

「ありがとうございます。寒さもゆるみましたで、少し楽な  
ようでございます」

伊作は吉村のだんなが、お袋の病氣のことを憶えていてく  
れたのを、うれしく思ったが、

「今日はどちらへお出掛けでございますか」  
と目的の質問をせずにはいられなかった。

「おう、お上直々の御用によって、薩摩の方まで探索に参る  
のだ」

「それは、いつも御多用で結構なことでございます。この頃、  
お城のおおぼえも目出度く、祝着に存じます」

土佐の国境地方の庄屋には、吉村や玉川のような、剣の心  
得のある者を配置してある。むろん苗字帯刀を許され、番人  
庄屋といわれる。

もっとも百姓には番人庄屋の存在をそれほどありがたがる  
理由はなかった。藩の任命だから、肩書かたがき給として、管理する  
土地の石高の百分の一を給される。それだけ農民の負担が増

えるということがある。そして吉村のだんなが、いくら石の  
貯金箱をつくってくれても、お上へ願いをくり返してくれて  
も、百姓伊作の生活は、少しも楽にはならなかったのである。

現にお袋に寝つかれてからは、それだけ手間が減った勘定  
なので、あと一カ月に迫った田畠の作り高も今年は控え目に  
してあった。借財もいつのまにか増えて来ていた。

「お互いに辛抱がかんじんだ。辛抱しろ。辛抱しろ。そのう  
ちに世が変わる」

これが吉村のだんなの口癖なのだが、この日だんなが別れ  
際にいった言葉には、少し変化があった。

「もう少しの辛抱だぞ」  
そういうと、明るく笑って、宮野々へ向うその道を歩いて  
行ったのであった。

吉村のだんなはその後のこの道を通らなかつた。伊作が吉村  
のだんなを見た最後になつたので、この言葉は彼の記憶に残  
つた。

「なぜ、あんなうそをいうのだ」

馬の手綱を曳き、吉村と肩を並べて、歩き出しながら、玉  
川はいった。

「なにが、うそだ。もう少しの辛抱に変わりはないではないか。  
百姓の生活を改めるためにわれら勤王の庄屋は働いているの



ではないか。殊にこの度は、薩摩の久光公を擁して、われら有志の回天の壮挙が、目前にせまっておる」

「いや、そのことではない」

玉川はたちまち演説口調になる吉村を手で制した。

「なぜお上の御用で、薩摩へ参るといふようなことをいう、と申しているのだ」

「はは、あのことか、あれは実は昨夜、別れの酒盛の席で、村の衆にもいったことだ。伊作にだけちがったことをいったのでは、話の辻褄が合わなくなる」

「では、なぜみなに大袈裟なうそをいうのだ。隠居の太平どの、お明どのにも、そういったのか」

「無論だ。年寄りや、女房によけいな心配をかけるものではない。喜ばしておくに限る」

玉川は黙った。彼は吉村より四つ年上の三十歳、祖父の代から宮野々の医を業とし、関所の番頭を務める土地の旧家の当主である。同じ勤王の志に繋がるにしろ、吉村のように、脱藩する気もなければ、うそをつく必要もないのだった。

彼がこんなに吉村のほらを気にするのは、それだけの理由があった。

「本間精一郎とか申す浪人に会ったぞ」

「それはよかったな。どうだ、なかなかの人物であろうが。

同志の間だけではなく、青蓮院宮はじめ堂上方のおぼえも目

出度く、頼もしい人物だ。本間の手引で、おれも有志の知合いが多く出来た」

「しかし武市先生は奸物だといわれたそうぞ」

玉川はにがしがしにいう。

本間精一郎は越後の浪人、はじめは幕臣川路聖謨の小姓に上ったが、京都に出て、この頃には青蓮院宮の家来ということになっていた。清川八郎、平野二郎と共に中国、九州の有志との間に、遊説していた。

この前の長州行きの際、三田尻で会い、土佐勤王党宛の紹介状を書いた吉村の添書を持って、この少し前に鬱原村に潜入し、四万川の庄屋那須信吾のもとに身を寄せた。

土佐勤王党の首領武市半平太に面会するのが目的だったが、武市は警戒して、部下二人を派遣したに止まった。本間は吉村が帰ると、入れ違いに、藩外に去った。

「奸物だ、幕府の間諜ではないか」

という不信の念は、いつの間にか各藩の志士の間に拡がっていた。半年後に本間が京都木屋町三条下ルで暗殺されたのは、武市のさし金だと言われている。彼は「吉村がどうしてあんな男に、たぶらかされているのか、わからぬ」といったとい

う。  
「武市先生の立場からは、そうなるのが当然だ」吉村はいい張った。「しかしおれはあの男の志を信じる。不思議に人に